

Title	To Alps of Chinese Tibet., By J. W. and C. J. Gregory
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1924
Jtitle	史学 Vol.3, No.3 (1924. 9) ,p.119(462)- 120(463)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19240900-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の結論は、アジア協會雜誌に轉載されてゐる。同氏が老嫗の口づからに採集した滿洲人の叙事詩 *Tepalin* もシヤモニズムの研究に多くの資料を提供するものなるが祖國の紛亂のため出版のはこびに至らぬことは残念な次第である。

(松本信廣)

Demonism verified and analyzed.

By H. W. White. Shanghai, 1922.

狐鳴きの如き鳴物の研究である。著者は、支那内地の宣教師で廿八年間支那人の間に於ける實驗の結果なりと銘をうち、非常な期待をもつて讀ませられたが中程から失望せざるを得なかつた。物鳴きすなはちデモニズムをもつて悪しき人格分裂なりとし、全く心理的原因、即ち正理に反する宗教信仰に起源するものであり主要な動機は暗示であつて、悪魔の働きに淵源する。従つて之を救済するには正しき宗教信仰、即ちキリストの暗示によらねばならぬとすのである。

(松本信廣)

The Town and Fort of Malacca.

Singapore, 1924.

マラツカの歴史と遺跡を略述したる小冊子である。シンガポールが創建百年に滿たぬ都市なるに比べて當港はカモエンヌの詩にも歌はれて由來極めて古い。ホルトガル人の要塞城門、葡人、蘭人の教會、三四百年前の支那移住民の墳墓などがなほ存在して古へを物語つてゐる。しかも吾人にまつて興味あるはかのフランシ

ス・ザビエルが日本布教の志を起したるはマラツカに於て日人ナシロウに會したるがためである。サンチアン島にて死去したる彼の遺骸はマラツカに送られて、一時サンパウロの寺院に葬られ、のちゴアに移されたのである。今も之を記念する黃銅板が教會内陣の南壁にのこつてゐる。

本書は之等遺跡の寫眞、當時の地圖などを挿入し、遊覽客のガイドブックにふさはしく編輯されてゐる。本書の賣上による利潤は當地に於ける舊蹟保存費にあてられるといふ。

(松本信廣)

To Alps of Chinese Tibet.

By J. W. and C. J. Gregory.

London, 1922.

著者は地質學者でヒマラヤ・アルプス山脈の崛起が如何なる影響をビルマ・マンイの山脈にもたらしたるか、ヒマラヤはその東端に於て如何なる走向をさるか、その他種々の疑問を解決せんとして雲南西藏國境地方の探險に志し。英國政府のチベット自治領内にいらざるかぎり許可すといふ條件の下に一九二二年ビルマより出發しサルウエン・メーコン河をわたり麗江、維西を經、阿墩子に至り、白馬山をよぎり揚子江上流を下つてまた麗江を經、ビルマに歸りし紀行文が本書である。最後に人種的觀察の一端、及び旅行の結果を約述してゐる。即ちマンイビルマの山脈は、ヒマラヤ隆起の多大の影響を受け、かつヒマラヤ山脈は南山々脈へこ走つてゐる。揚子江が石鼓に至り、急激に屈曲せる理由は斷層の

結果であり、此地方に普通なる北より南に走る斷層は、アフリカ
西亞、インド・オーストラリアの溪谷、海岸斷崖の或物を生みし
共通生因の結果であり、その分布、及び方面は、印度洋の陷沒、
アフリカと南東アジアの分裂を物語るものなりと述べてゐる。

(松本信廣)

The Mystery Rivers of Tibet.

By F. Kingdom Ward.

Lond., 1923.

著者は植物採集家で前者と同じく雲南西藏國境、サルウエン・
メーユン、楊子江三河上流の探險採集旅行記である。たゞ前者が
題名とふさはしからず高山の叙述少きに反し、本書は高山植物と
氷河について一層委しき觀察をなしてゐる。然しカカルボ、パイ
マシヤン等の處女峯については著者はその登路を指摘するにミダ
まりその山頂征服の事業を將來の勇悍な登山家達に委ね、自らは
雪線附近の植物採集をもつて甘んじてゐる。鮮明な雪の山の寫眞
を多く挿入し、夏季ひとどくにふさはしき良著であり、山岳會の
諸氏に一讀を勧誘したき書物である。

(松本信廣)